

(患者を生きる:4048)新型コロナ 在宅でのケア:1 欠かせない感染症対策

会員記事

2020年11月10日 5時00分



金野太晴くん＝父親の幸雄さん提供

インフルエンザの流行が終わる春は、横浜市の金野幸雄(こんのさちお)さん(44)一家3人にとって、外に出かけたくなる季節だ。だが今年は違った。新型の感染症なんて、考えたこともなかった。一家はいまも感染への恐怖と闘い続けている。

妻の晴子(はるこ)さん(48)が妊娠8カ月のとき、おなかにいた長男太晴(たいせい)くん(11)は、神経が通る背骨のトンネルの形が一部不完全な「二分脊椎(せきつい)症」と診断された。生後5カ月で気管切開の手術を受け、24時間人工呼吸器を必要とする。1日に150回

以上のたんの吸引があり、そのたびに感染のリスクにさらされる。歩くことはできず、上半身にまひが残っている。気持ちを言葉にはできないが、表情はとても豊かだ。

自宅での生活を考えたとき、晴子さんは「急に太晴の体調が悪くなったらどうしよう」と不安だった。「せや在宅クリニック」の大村在幸(おおむらありゆき)院長(49)が「お父さんとお母さんと一緒に過ごしてみはどうですか」と後押しした。太晴くんは5歳の誕生日の前日に退院し、大村さんが月2回の訪問診療でサポートしている。

太晴くんは学校が大好きで、平日は晴子さんの付き添いで特別支援学校に通う。帰宅後は週5日、訪問看護のスタッフに来てもらって入浴する。休日には車いすに乗って近くのスーパーに行くなど、積極的に外に出ていた。

一家は毎冬、インフルエンザがこわい。大病の経験はないが、太晴くんは一度体調を崩すと治るまでに人の倍の時間がかかり、一気に体力が落ちる。だから生活リズムをなるべく変えず、予防接種や手洗い、人混みを避けるといった基本的な感染症対策を心がけてきた。マスクと消毒液は必需品だ。

今年1月、中国・武漢で新型コロナウイルスの流行が報じられた。日本国内は、まだ店頭でマスクが並んでいたこともあり、晴子さんは「太晴の5年生の残りの学校生活をどう楽しく過ごそうか」と、あまり気にしていなかった。

ところが2月、事態が一変した。横浜港に停泊したクルーズ船ダイヤモンド・プリンセスで、連日新たな感染者が確認された。店頭からマスクや消毒液が消えていった。(後藤一也)

◆4回連載します。

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、iryok@asahi.com へお寄せください。